

2021年9月NHK近畿地方放送番組審議会

9月のNHK近畿地方放送番組審議会は、15日(水)、NHK大阪拠点放送局(ウェブ開催)において、9人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「2021年度後半期の国内放送番組の編成」および「2021年度後半期の近畿地方向け番組編成」についてそれぞれ説明があり、「2022年度の番組改定」とあわせて意見交換を行った。続いて、事前に視聴してもらった、終戦ドラマ「しかたなかったと言うてはいかんです」、「こどものど自慢」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長 篠 雅廣(大阪市立美術館 館長)
副委員長 帯野久美子(関西経済同友会 常任幹事)
委員 安達 えみ(合同会社 榎 代表)
井上信太郎((株)善兵衛 代表取締役)
佐伯 順子(同志社大学社会学部 教授)
笹岡 隆甫(華道 未生流笹岡 三代家元)
藤本 真一(NPO法人阪神淡路大震災1.17希望の灯り
代表理事)
堀江 尚子(認定NPO法人 くさつ未来プロジェクト 代表)
矢崎 和彦((株)フェリシモ 代表取締役社長)

(主な発言)

<「2021年度後半期の国内放送番組の編成」および
「2022年度の番組改定」について>

- Eテレで女性の視聴者を意識した番組を放送するとのことだが、イメージしている女性の層はどのようなものなのか。

(NHK側)

「ソーイング・ビー4」は、女性はもちろんだが、女性・男性を問わずナチュラルライフに興味がある方たちを意識しており、その新シリー

ズだ。また、11月にはSDGs、特に環境・ジェンダー・若者をテーマとしたキャンペーンを行い、様々な特集番組をお届けする。

<終戦ドラマ「しかたなかったと言うてはいかんのです」

(8月13日(金)放送)」について>

- 戦争をテーマにしていることもあり重い雰囲気、考えさせられるドラマだった。番組タイトルが印象的だが、登場する陸軍中將が主人公に言った「何もしなかったという罪」ということばも心に残った。このことばが主人公にとっても生涯かけて悩み続けるきっかけになったと思う。何が正解だったのかを考えさせられ、見終わった後もよい意味でもやもやする内容だった。主人公の世代と、戦争を知らない世代とでは、この番組を見たときの感じ方が違うのではないか。
- 戦争における非常に厳しい現実を映像で伝える意義深いドラマだった。ドキュメンタリー映像とドラマを組み合わせることで、リアリティを感じさせられたし、戦争経験がない視聴者にも訴えるものがあつたのではないか。しかたなかったと言ってはいけない、という教訓は非常に心に響くもので、ドラマでは命に関わる過酷な状況だったが、現代社会でも会社の上司や多数派に押され、やむを得ず何かをしてしまうことが場合によっては起こりえる。そういう人がドラマを見たときに、やはりしかたなかったと言ってはいけないと感じる教訓になったのではないか。じくじたる思いを抱えながら、組織に属して生きる現代人に勇気を与えるメッセージがあつた。
- 視聴者に考える機会を提供する教育的によい番組であり、出演しているキャストもよかった。「何もしなかった罪もあるのではないか」、「戦争だからしかたなかった」という台詞をはじめ、簡単に結論の出ない難しい問いかけがあつた。「きなさんなや」という陸軍中將のことばや、我が子の「お父さん」との叫び声は有事にあっても変わらない人間や家族のぬくもりを感じた。有事において冷静な判断が極めて困難であるという命題はもっともだと思うが、現代の状況にも通じることだ。先の見えない新型コロナウイルス流行下で、冷静な判断ができているか不安にも感じ、また冷静にものごとを見なさいと諭されているようにも感じた。タイトルがドラマのクライマックスをそのまま表現しており、物語の結末を先に知ってしまうようで少し残念に思った。

- 戦争を経験した世代が少なくなり、戦争について考える機会が減るなかで、戦争とはどのようなものなのかについて伝えるよい番組だった。ドラマというより映画のように引き込まれ息をするのも忘れたほどだった。同時に、戦争が人間をおかしくしてしまうということから、新型コロナウイルスに振り回される現代を連想させられた。題名は、まさに子どもたちや現代人に向けて発しているようなことばであり、周囲の空気に流されない信念が大事だと感じた。描かれたことを肝に銘じて、間違った判断をしないようにと自分のこととして感じられる番組だった。

- 当初は重すぎる感じがして全く見る気がしなかったが、見始めるとぐいぐいと引き込まれ見ごたえがあった。戦時下という特殊な状況において、命を軽んじることが正当化されることの恐ろしさを痛感した。人や社会を狂気に導いてしまう戦争を二度と起こしていけないと考えさせられる意義ある番組だった。まるで映画を見ているようで、映像も出演者もよかった。主人公が釈放され、夫婦二人で赤い傘をさして歩いていた終盤のシーンは印象的な映像だったが、途中気象警報の速報スーパーが入った。美しい映像やストーリー展開を考えると残念で、地域やタイミングを配慮してほしかった。NHKは良質な番組が多く、このドラマも次世代を担う若者に見て欲しいが、本当に伝えたい世代に伝わっているかは疑問に感じた。

- 冒頭の手術シーンで一気に引き込まれた。出演者は若い世代からも人気の俳優で、チャンネルを切り替えているときに出くわすと、ついつい見てしまうのではないか。また、随所に使われた記録映像が、当時を知らない人には印象に残ったと思う。タイトルにもある、しかたなかったと言っではいけないということばからは、どうすればよかったのかという正解はなく、ずっと考え続けなければならないと感じさせられた。最後のシーンで、釈放され年を重ねた主人公に若い記者が話を聞くという構図を見たとき、戦争については若い世代にもっと語り継がなければならないと思った。こういう戦争に関連した番組が、若い世代に必然的に見てもらえるような形があればよいのではないか。

- 冒頭の実験手術のシーンは見るに堪えがたく感じていたが、番組を見ていくにつれ引き込まれ、感動するドラマだった。主人公はもちろん、妻の献身やアメリカ兵の

人としての優しさなど、どのシーンを見ても人間模様が素晴らしく描かれていた。実際の裁判の記録や多くの証拠もあり、それらを検証して制作した番組だと思うが、どこまでが史実でどこまでがフィクションなのか気になった。戦時中という異常な状況下に限らず、正しいことを正しいということは難しい。また、時代とともに人の価値観は変わっていくので、その時のベストな判断に基づいて発言、行動をしたと言い切れる信念が大切だと感じた。NHKとして、何を伝えようとしてこの番組を制作したのか、なぜこのタイミングなのか、制作・放送に至るまでに局内でどのような意見があったのか知りたい。

- 陸軍中將が主人公に言った「きなさんなよ」ということばによって、主人公が個人で責任を負うことの葛藤がうまく表現されていた。拘置所に家族が来て面会し、帰るときに長女が「お父さん」と呼ぶシーンなどは、主人公の心の揺れを繊細に表現していると思った。このドラマのもととなった事件については知っていたが、こういった問題の責任を個人に負わせることは辛いと感じる。科学が戦争に利用されることの危険性は、以前から警鐘を鳴らされていたが、考えさせられる問題だ。戦争の記憶を伝えていく難しさに加え、記憶を伝えていく態度がどのように引き継がれていくかということの難しさも実感した。タイトルにもあるように、正しい意見が言いにくいということはよく起こりえることで、身につまされるようなドラマだった。演出で気になったことは、独房の中で、夕方にカラスが鳴くシーンがあったが、急に現実に戻された気がして少し興ざめした。

(NHK側)

一番伝えたいことをそのままタイトルにした。個人に責任を負わせることについてのご意見もあったが、だからといってしかたないと言ってはいけないということテーマとした。現代にも繋がることだというご意見をいただいたが、今だったらどうするか、あなただったらどうするかといった問いかけをしたいと考えた。もととなった事件があり、主人公のモデルになった人物が晩年に至るまで「しかたなかったと言うてはいけない」と語っていたという事実をもとに、ドラマとして制作した。若い視聴者層にどう届けるかについては、大きな課題だと認識しており、今後も番組制作や広報で工夫をしていきたい。

<「こどものど自慢」

(8月15日(日)総合 後12:50~13:30)について>

- 純粹に楽しく見ることができた。祖父母への思いを込めて歌っている子どもたちの姿は胸に迫るものがあった。
- 新型コロナウイルスの流行下での全国の子どもたちの生活や、それぞれの地域のことばにも触れながら、歌を通して地域や家族をつなぐ意義深い番組だった。出演していたタレントもほのぼのとコメントしておりよかったが、このタレントの人選の理由が知りたい。
- こうした視聴者からの投稿を使った視聴者参加型の番組は、もっと作られてもよいと感じた。出演していた子どもが、将来の夢は歌手になって動画投稿サイトに出ることだと言っていたが、子どもたちにとって、テレビに出演することよりも、動画投稿サイトで有名になることの方が価値があるということに驚き、子どもたちのテレビに対する価値観が表れているコメントだと思った。また、コンテンツに対する世代間のギャップがなくなっていることも感じた。動画投稿サイトやビデオオンデマンドが広まり、老若男女問わず同じコンテンツを視聴することができるため、番組の作り方もそういう視点をもっと持ってもよいと感じた。
- スタジオのセットがキャンプをイメージしており楽しい雰囲気が伝わってきた。出場していない子どもたちの動画もあり、受験やスポーツ、学校のことなどそれぞれが置かれている生活環境もさまざま、多様性がわかりやすく表現されていた。通常の「のど自慢」と違い、鐘を鳴らす判定がなかったので歌のうまさではなく、歌が人と人とのコミュニケーションの手段だということや、誰かを思う気持ちや感動で人は元気になるということが伝わってきた。タレントも老若男女がそろっておりよかったし、出場者も性別や年齢を考慮して人選していると思うが、LGBTの方もいれば、番組を見ている子どもたちも自然に多様性について学ぶことができるのではと思う。
- コメントしにくい番組だった。出演している本人や親族にとってはよい番組だと思う。生放送だったが、事前に投稿や収録された映像が多く、この番組を続けるのであれば演出についてももう少し工夫した方がよいと感じた。

- いろいろな環境の子どもたちや家族が出演していてよかったが、生放送なのか収録なのかわかりづらかった。最後のスタジオでの出演者の掛け合いは慌ただしかったが生放送らしさを感じた。

(NHK側)

コロナ禍で、子どもたちが今何を思っているのかを届けるために、「こどものど自慢」を制作した。出演タレントは、自身の子どもや孫を見る目で感想を語って欲しいということで起用した。出演者や視聴者を一人でも多く笑顔にできる番組をこれからも多く制作していきたい。

<放送番組一般について>

- 東京2020オリンピック・パラリンピックの放送に関して、開催自体には賛否両論あったかと思うが、特にパラリンピックについては、障がいのある方たちの頑張りや、普段あまり目にしないスポーツを、丁寧な解説とともに届けることで、障がい者と健常者とのコミュニケーションを活性化することに貢献したと思う。サブチャンネルを使って、できるだけ多くの競技を放送したこともよかった。一方、同じ時期に放送していた全国高等学校野球選手権大会について、全国の関心が高く関西地方から発信するスポーツイベントとして大変重要だとは思いますが、最近はスポーツも多様化しており、サッカーの女子リーグも始まった。女子スポーツやマイナースポーツもきめ細かく発信して欲しい。

新型コロナウイルスと大会開催との関係については、多くの人に関心を持っており、感染者数の増加には大会が影響しているのではないかと考える視聴者も多いと思うが、そのことに言及する専門家が少ないと感じる。大会を開催した東京の感染者数と大阪の感染者数の変化がどのように違うのかを知りたい視聴者はたくさんいる。こうした視点で放送できることがあれば、是非取り組んでいただきたい。

NHK大阪拠点放送局
番組審議会事務局